優秀賞

私の部屋の窓の風景

南小学校（十和田市）
六年　沼沢美羽

私の家のまわりには、一面田んぼが広がっています。米作りを通して、一年中いろいろなけしきを楽しむことができます。

春、田植えの季節です。冬の間にかたくなった土を、トラクターでたがやします。

「春になったよ。おきて。」と、いっているような気がします。土の中でねむっていたカエルも、目を覚まし、そのカエルをねらって、たくさんのからす達が飛んで来ます。そして、トラクターを先頭に、からす達が一列にならんで付いて行くのです。まるで、運動会の入場行進に見えてきて、私まで体が動いてしまいそうです。カエルの合唱と共に田植えが始まり、田んぼ一面が若草色に変わります。それが大きく育ち稲穂が出始めるころには、赤とんぼやギンヤンマの姿を見ることができます。そして、若草色だった一面が黄金色の稲穂に変わり、たれ落ちそうになると、十五夜のお月様と共にすずしさがもどってきます。

秋、緑のくきや雑草が育って、稲穂が黄色くなったら、いよいよしゅうかくです。重そうに実をつけた稲穂が低くたれ下がり、今か今かとしゅうかくを待っています。コンバインが手ぎわよく稲をかりとると、何とも言えない、いい香りがします。そうしてかりとられた稲はせい米され、お米へと変身するのです。

冬、田んぼには何もなくなります。でも、さみしさはありません。ネコやキジが走り回り、ハトやすずめもおり立ちます。雪がふればふわふわのかき氷。それと、米づくりの作業をしていた人達が、手をふってくれた時のうれしさや喜びの気持ちが残っています。冬の間も、田んぼはいろいろな表情を見せてくれます。

田んぼは、稲やたくさんの生き物と共に生きています。毎年おいしいお米が食べられることに感謝して、これからもずっとこの風景が続くことを心から願っています。

私も米の稲かりをしたことがあります。これは私が小学三年生のころの話です。私は、ひいおばあちゃんと、稲かり体験をしに、バスで黒石にむかいました。集合場所の田んぼには、たくさんの人がいました。くばられたかまで、稲をかろうとした時、指導の先生が、「稲を左手でつかんで、かまで稲をかる方が手ぎわよく、かることができる」ということを教えてくださいました。こんなに暑い中でも米づくりをする大変さを知ることができました。だから、お米を食べるときには、お米をつくってくださる人達のことを思いうかべながら、おいしくいただこうと思います。

優秀賞

私と家族とご飯

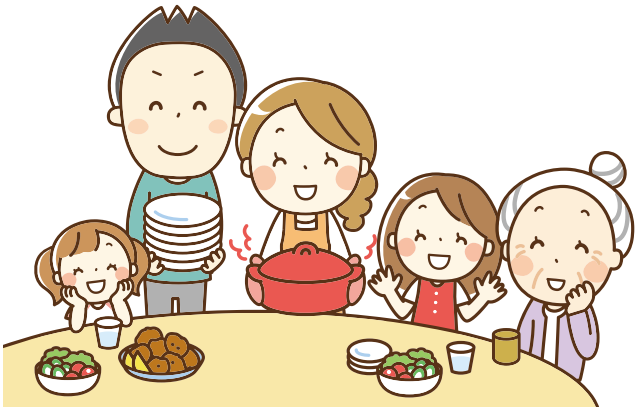
東北小学校（東北町）
六年 町屋朋佳

私にとって、ご飯の時間は、宝物である。ご飯の時間は、なにげない日常に見えるが、とても大切な時間だ。

私の家では、夜ご飯、祖母や母のつくった料理を食べ、会話をしながら、ご飯を食べる。父や母が、仕事でおそく帰ってくるときもあるが、お祝い事や誰かの誕生日だと、必ず家族全員でご飯を食べる。私は、この時間が大好きだ。どれだけいやなことがあったときも、家のご飯を食べると笑顔になれる。今年の私の誕生日は、特にそうだ。今年の誕生日は、夏休みの三日前だった。学校生活をいつもと同じように過ごしていると、私のクラスが突然、学級閉鎖になった。学校が大好きな私は、落ち込んだ。心の中で「最悪な誕生日だ。」と思った。そんな私を、笑顔にしてくれたのは、妹と母の手料理だった。妹は誕生日の私のために、レシピ本を読み、母といっしょに料理をつくってくれたのだ。とてもおいしい料理や、やさしい家族のおかげで「最悪の誕生日」から「最高の誕生日」になった。

私はお米とおかずを、いっしょに食べることが好きだ。もし次の日、なにか勝負事や、頑張らなければならない事があると、祖母が、お米にあうおかずをつくってくれる。このように、私にとって、ご飯や料理は、私を元気にしてくれる存在だ。お米大国、日本に生まれてよかったと思うこともある。始めにもいったとおり、私は食べることが好きだ。だけど、その中でも、大好きな家族といっしょに食べるご飯が、一番大好きである。私は、世界中の子供たちが、ご飯を食べることができていると思っていた。しかし、ちがったのだ。前あるＣＭを見た。そのＣＭには「日本では、最後の一粒まで食べなさい。」というけれど、最初の一粒もない国がある。というものだった。私は、あたりまえのように、家族とご飯を食べていたけれども、家族と食べるどころか、食べる物も全くないということに、私はショックを受けた。毎日、ご飯を食べられるということは、あたりまえではなく、すばらしいことなのだ。このＣＭを見てからは、家族との時間、食べ物を食べる時間を、大切にしようと心がけた。

このように、ご飯を食べること、家族のことを大切にすることは、とても重要だ。これからも、この二つを大切にしていこうと思う。そして今日も、私が生きるために命をくれた動物と植物、私の大切な家族、私が生きるために支えてくれている人々に、感謝しながら、手を合わせて、「いただきます」。



優秀賞

お父さんのたくご飯は

横内小学校（青森市）
六年　山内（やまうち）　真人（まなと）

「あまくてなんでもあうなあ。」
お父さんがたいてくれたご飯は、あまくて何にでも合いました。
「お父さんがたいたご飯はおいしいね。」
とぼくが言うと、
「いつものと変わらないでしょ。」
と、お母さんが言いました。
「何でもおいしい、おいしいって言っていつも食べるじゃない。」
と、お母さんが続けて言いました。ぼくは、首をふって、
「お母さんのとはまるでちがうんだよ。」
と言いました。この日はお父さんの仕事が早番でした。いつもならお母さんがたいているご飯をお父さんがたくことになったのです。
　ご飯はだれがたいても味が同じという感じはしませんか。今までのぼくはそう感じていました。でも、この日お父さんがたいてくれたご飯はやわらかくて何でも合いました。ぼくはお母さんにこう言いました。
「お母さんがたいてくれたお米は、ちょっとかたいんだよ。だからカレーライスには合うけれど、他には合わないんだ。」
この言葉を聞いて、お父さんはとても喜んでいました。ぼくは食感以外にお父さんのたいたご飯がどうしておいしいのか、よく観察してみました。
　まずご飯から湯気が出ていました。そして真っ白くてもちもちしていました。
「どんなにおいかな。」
茶碗に鼻を近づけて、においをかいでみました。
「なんか食欲をそそる、ご飯独特のにおいだなあ。」
とぼくは言いました。こんなふうに、ご飯について、くわしく見たり考えたりしたことは初めてでした。
　ぼくは、この日ご飯を三杯食べました。一杯目はふりかけをかけて食べました。
「とてもおいしい。」
　次にお肉をおいて牛丼みたいにして食べました。
「おかずにも合うね。」
　三杯目はそのまま食べました。
「もうおなかぱんぱんだよ。」
そして、ぼくはお父さんにこう言いました。
「お父さん、すごくおいしかったから、ご飯のたき方教えてね。」
お父さんは笑いながら、
「もちろん。」
と言いました。ぼくは今まで感じたことがない満足感を感じて、つかれが全部ふきとんだ気がしました。そして、この日ぼくは最高にうれしい言葉をお父さんからかけられました。
「おれたち、気が合うね。」

優秀賞

ご飯が好き

西白山台小学校（八戸市）
六年 粟津彩恵

「彩恵ってねえ、赤ちゃんだったころは、ご飯（お米）を全然食べなかったんだよ。」

母にそう聞かされたのは、つい最近のこと。私は、小学生になってから今に至るまで、ずうっとご飯が大好きで、食べなかった時期なんてないと思っていたのに。母の、この発言には、かなりおどろきました。

「口に『あーん』って入れても、すぐにぺってはき出してたったよ。」

…私にそんな過去があったなんて。今の「朝ご飯は絶対ご飯!!」って言ったり、給食のご飯の量が多めじゃないと気になったりする自分からは、全く想像できません。

「どうして食べなかったんだろね。」

私が聞くと、母は、

「離乳食ってほら、おかゆみたいに食べやすく、やわらかくしてるからじゃない？」

これを聞いて、私はぎくりとしました。なぜなら、今の私は、おかゆも食べることはできるのですが、炊いたご飯の方が好きだからです。炊いたご飯のほんのりとした温かみ。あの感覚が、たまらなく好きなんです。ふっくらとした食感も、大好きです。朝にご飯を食べたい理由も、それと同じです。朝の目覚めにおいしいご飯。みそ汁に焼き魚。わが家の朝食は、いつもこういう感じです。家族でわいわい言いながら食べるご飯は、とてもおいしく感じます。

「でも、いつのまにか、ご飯が好きになってたよねえ。」

そう。その通り。今思うと、色々と、ご飯が好きになるきっかけとふれ合っていたからかもしれません。

二年生のころは、初めて米とぎをして、自分でといだご飯を食べて、お米とぎの大変さを知り、お米を大事にしたいと思いました。

三年生では、もち米を使い、おはぎを作り、お仏だんにおそなえして、お米はこういう物にもなるんだ！と、もっとお米のことが好きになりました。

四・五年のころは、お米を作る工程を知り、米の消費量が減っていることで転作をしている人が増えたということを学びました。まずは、お米をたくさん食べたり、お米をむだにしないようにしたりと、できることから始めていこうと思いました。

そして、今は、ご飯が大好きです。今までの経験を生かして、米とぎを上手くできるようになりました。流しに米を流してしまうことも減りました。他にも、朝・昼・晩のご飯もきちんと食べています。前よりも、もっとご飯への感謝が深まったと感じています。

そして、夕食の時間。家族でわいわい食べながら、私は思います。今も、これからも、「ご飯が好き」って。

優秀賞

お米に感謝

向小学校（南部町）
六年 大向蓮音（おおむかいれんと）

三月の雪どけ、春が近づいてくると田んぼ農家のお母さんの実家は忙しくなる。毎年同じ時期におじいちゃんから電話がきて田植えまでのスケジュールがのべられる。

四月中旬、千枚くらいのパレットに種もみを入れて田植えができるように苗を育てる。朝、晩、苗に水をかけてハウスの温度管理もする。五月中旬、いよいよ田植。ぼくは田植機の後ろに乗り、苗がまっすぐ植えられているかを見ながら苗のほじゅうもする。種もみの時は、軽かったのに、苗となると重く感じる。重労働だ。失敗しないようにコツも教えてもらう。初めは、うまくできず何度も機械をとめてしまっていたけど、落ち着いてゆっくり作業していくうちに上手になったとほめられたら、さらにやる気がでて、二日間の田植えはあっという間に終わってしまった。田植えのとき、疲れた体で、外でみんなで食べる塩おにぎりは、いつものおにぎりよりなぜかおいしく感じた。そのおにぎりを食べながら、この苗が秋にはお米に変わり、ぼくたちの胃ぶくろに入ると思ったらワクワクしてきた。田植えが終わってから、おじいちゃんの仕事はさらに忙しくなる。田んぼの水の管理周りの草かり、一日もかかさずやっていて、

「子供を育てるように愛情をそそぐ」

と言っていた。おじいちゃんの田んぼの苗たちは、幸せだなあと思った。時々、お母さんの実家に行ったとき、ぼくもおじいちゃんと一緒に田んぼの様子を見に行く。苗が少しずつ成長しているのを見て早く新米が食べたいなあと思う。

お盆が終わり九月になると、春に植えた苗は金色になり、穂先は、下を向いている。「今まで育ててくれてありがとう。とても米がびっしりでおいしいですよ。」と稲が言ってるように感じた。稲かりをして脱こくをして乾燥して精米して、お米をたいてぼくたちの胃ぶくろの中に入る。茶わんにもったごはんは、真白でピンと立っている。口に入れてかむととても甘い。おじいちゃんの自まんの米だ。

おじいちゃんが米という漢字について教えてくれた。米は「八十八」という文字から作られた。昔は、今のように便利な機械がなくほとんど手作業で行っていたため、八十八回の手間がかかるということから米という漢字が作られたようだ。

「昔に比べたらずいぶん楽になった。」

とおじいちゃんは言ったが、米になるまでの管理はとても大変だと思った。不自由なくごはんを食べれていることをあたり前だと思わずに、感謝を忘れず食事をしたいと思う。